

立原正秋全集

第一卷

立原正秋全集

立原正秋全集

第一卷

角川書店

立原正秋全集 第一卷

昭和五十七年九月十二日初版発行
昭和五十七年十一月十五日三版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

振替東京三―一九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573401-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集

第一卷

目次

他人の自由

五

血の畑

九

晩夏

一七

遁走曲

一七

セールスマン・津田順一

二七

梶のある家

三九

乾いた土地

三二

夜の仲間

三九

聖クララ村

三四九

「接吻」と五つの短篇

三六七

「八月の午後」と四つの短篇

四一九

宏子と三つの短篇

四四三

解題

武田勝彦
四六一

他人の自由

竊廻愚案、粗勘古今、歎異先師口伝之真信、思有後学相統之疑惑。幸不
依有縁知識者、争得入易行一門哉。全以自見之覚悟、莫乱他力之宗旨。

歎異鈔

一

手形詐欺罪の嫌疑で未決に入っていた男のために、地方検察庁に三万円の保釈金をつんで連れだしたのは、二か月前だった。

冬子は男と連れ立ってT署をでて、八月の陽盛りの繁華街を国電の駅に向って歩いた。どこかが狂っていた。二人のあいだには一か月という時間の断絶があったが、しかしどこかで通い合うものがあっていい筈だのにと思いながら冬子は、横を歩いている男の顔を見あげた。

男はちらと卑屈なわらいをうかべた。瞬間、冬子は、これがあの男だろうか、と戸惑った。男の表情はみじめだった。前年の暮に、冬子のでている酒場にはじめて現れた男は、文字通り颯爽としていた。その時分男は、中古車ではあったが、外国製のスポーツ車を乗りまわしていた。なにをやっているのか不明だったが、男は惜し気もなく金をつかった。ちょうど、二年越しに同棲していた中年の雑誌記者とのあいだがうまく行っていない時だったので、なにもかもが変ったかたちで現れた男に冬子は傾いて行つた。

雑誌記者には妻子がいた。二年前の春、冬子がある大衆雑誌の出版社の事務員として入社したとき、その編集長をやっていたのが皆川だった。簿記も算盤そろばんもできない冬子は、皆川の秘書のかたちで働いていた。冬子を自分のもと

に引っぱった皆川は、冬子のでている酒場の常連だったのである。

三か月たってその出版社がつぶれたとき、冬子は皆川を愛していた。冬子は、一人の雑誌編集者がもっている雰囲気
に眩惑されていた。編集者としてはかなり独創的な手腕をもっていたが、大人の目からみたら、すべての点で事物
の皮相だけを吸収している男だった。中年の都会人がもっているなにかやりきれない憂鬱な雰囲気と、底の浅い適度
の虚無的な匂いを男は身につけていた。

そうした皆川を愛しはじめたことを、冬子は誇りに思っていた。妻子のある男を愛したことは、自分が世俗的なも
のから超越しているからだと思った。

そして皆川が独立して新規に出版社をつくるべく計画しはじめたとき冬子は、以前でていた酒場にまたでることに
した。理由は簡単だった。皆川が成功するまで助けてやりたかったのである。

ところが皆川は、はじめから計算して冬子とつきあっていた。皆川は冬子と結婚する意志のあることをほのめかし
ていたのだ。それからしばらくのこと、皆川の妻が家出したり、子供をどっちが引きとるかなどで、いざこざが続い
たが、結局皆川は妻のもとへ帰って行った。皆川の態度はいつも曖昧だった。考えようによっては、皆川ははじめか
ら終りまで、思わせぶりだけで冬子をひきつけていたとも言えた。誠実な冬子を裏切れなくなって、芝居をすること
によって結果をだそうとした。もちろんその結果を皆川は最初から考えていた。

皆川はたいへんなドン・ファンだった。ドン・ファンの実態がどんなものであるかを知りもせずに、冬子は、そう
した男から愛され、愛することに一種の誇りを抱いていた。つまり、ドン・ファンというのは女を見る目が肥えてい
る。そうした男から愛されたということで、女はますます自尊心うぬぼれをつよくするのだった。一皮剥はげば、そこに、ごく
つまらない一人の男が存在しているだけのことでしかなかったが、冬子にはそれを見抜くだけのちからがなかった。
皆川の曖昧な態度に業ごをにやした冬子は、ちょうどその時分現れた現在の男、園部をライバルに仕立てて皆川のここ
ろをつなぎとめようと試みたこともあったが、のたうちまわったあげくの果ては徒勞に終った。

園部は、たいそう変った現れ方をした。単純で直截なものをもっていた。神経質な皆川にくらべると、驚くほどの図太さを身につけていた。園部は明確な線を備えていた。すべてが皆川とは正反対な現れかたをしたのだ。いやおうなしに冬子のなかに進入してきて、どっかと坐りこんでしまった。皆川とは切れていたわけではなかったから、園部から逃げることもだってできたのに、ここでも冬子はまた男をよく見なかった。園部は典型的な性格破産者だった。冬子が、単純で直截で明確な線を備えているとみたのは、実は園部の知性のない粗野な面だったのだ。

園部がなにをしているのか冬子をはじめのうちはわからなかったが、詐欺業が園部の仕事だった。かといって悪人でもなかった。園部は自分の悪を体系づけるだけの頭脳と能力を持ち合わせていなかった。

園部は、他の誰もができないような冒険をしたいとか、大金をつかみたいとかいった風に、始終、現実から遊離した夢想ばかりしていた。反面、園部には小細工を弄する一面があった。園部はある私大の経済科をでていると自称し、自分がいかに大きな冒険を夢みているかという証拠に、冬子と同棲をはじめたとき、いろいろな本を運んできた。ほとんど冒険や探険に関する本だった。冬子などにはわからない哲学や歴史、科学の本などもあった。じっさいは園部がそれらの本の内容を理解するちからがないのを冬子が知ったのは、だいぶたってからだだった。園部がわかりもしない本を冬子の前に見せびらかしたのは、なんとかして自分を一人前の知識人に見せたいというところからだだった。浅はかというより涙ぐましい努力だった。

園部と最初の夜をすごしたのは正月二日で、ある三業地にある割烹料理屋だった。手引きをしたのは、冬子と同じ酒場にでている糸子だった。園部は最初から糸子を通じて冬子に近づいてきたのだった。ちょっと遊びに行くといつて糸子と連れ立ってでかけた冬子は、なにもかも忘れて崩れてしまい、三日間をその料理屋ですごした。ある意味では皆川を忘れるための行為だった。つまり園部に依頼されて糸子がお膳立てしたところへ冬子はいやおうなしに飛びこんでしまったのである。

それから一週間ほどたった頃、糸子が園部をつれて冬子の間借先を訪ねてきた。午前のことと冬子はまだ寝ていたが、糸子が園部をつれてきたと言ったとき、冬子は狼狽した。そこは皆川とのかずかずの想い出をつなぐ唯一の部屋

だったのだ。その部屋へ、つい一週間ほど前に寝た別の男を入れるわけにはいかなかった。しかし園部は強引だったし、手引きをした糸子は遣手^{やうて}婆さんのような女だった。糸子は若い前衛画家を愛人にもっていたが、彼女が不感症のために、画家とは交渉がなかった。ただ世話好きな性格から愛人をもっているにすぎなかった。だから他の男女の仲をとりもつことも、彼女の変態的な趣味だった。

こうして園部のもとへ走ろうとする冬子に、皆川は、半年とは保つまいと評したが、それが冬子に向って言われたものなのか、あるいは園部に向って言われた言葉なのか、そのとき冬子はきき流したものだ、それが事実となって現れたのだった。

真昼の太陽が舗道を灼^やいていた。

冬子はどういちど園部の横顔を見あげた。園部はやはり弱々しくわらって応えた。園部はいつも相手の顔をまっすぐ見なかった。冬子はそのことに気づいたのは、同棲してだいぶたってからだ。

冬子は身内がうそ寒くなった。園部と同棲するときまっと冬子は、それまでの間借先を引きあげて、新しい部屋を見つけた。ひとつきとたたぬうち冬子は、園部が詐欺師であることをうすうすかぎとってしまった。しかしそれを表面にだすことはしなかった。ある面ではたいそう激しい性格である冬子は、そうした園部に未知なものを見出し、それに惹かれていた。そうした面では冬子は相手を批判することも自分を抑制することもできなかった。自分の愛人に、悪に徹している男の映像を勝手に造りあげ、自分のすべてをそこに投げ入れてしまった。冬子はすべてのことに実感主義で通っていた。自覚以上のことは、例えば目の前にあっても、それを信ずることのできない女だった。彼女は小さい頃から我^がのつよい子だった。そのため、よく母親から打たれた。あやまらなければ食事を与えられなかったが、彼女はあやまらなかった。そうして、ながい一日を人気がない部屋のすみに膝をかかえて、うずくまってすごした。姉がこっそり食事を運んでくれても彼女はふり向かなかった。しまいには母親が折れてでた。子供ながらに母親

の仕打ちを残酷に思った。長ずるにしたがい母親を憎みだした。お前達のために苦勞してきたのだから、お前達は親に孝行すべきだと母親から言われるたびに、彼女は、それが母親の押売りとしか思えなかった。

彼女は母親の愛というものを信じなかったし、そうした自分を不幸とも思わなかった。例え周囲から道楽者だと指弾されても嘘のない生きかたをしている父親の方を信ずることができた。

彼女は子供の時分から友達をつくらなかった。ひっそりと自分だけの世界を求めていた。いつから絵に興味をもちはじめたのか彼女は自分でもはっきり覚えていなかったが、絵がもっている色彩感の世界だけは無条件に信ずることができた。殊に赤い色をながいことみつめていると、色のなかに吸いこまれて行きそうな眩惑を感じた。赤い色は彼女にとってはおもっても単純で、直截で、明確で、美しかった。赤い色は彼女になしなまでの感動をさそった。やがて彼女は実生活の面で赤い色を求めはじめたが、一途であっただけに、相手を識別するゆとりをもたなかった。

こうした冬子の感覚に、詐欺師の園部は誂え向きだったのである。詐欺という悪を身をもって実行している男の行動が、冬子の美的感動をよんだのである。衝動的な美への憧憬。悲壮美へのあこがれ。言いかえれば冬子はそんなものをさがし求めて生きていた。

そうして追い求めた結果が、いまこうして白日のもとにさらしだされているのだと思うと、冬子はうそ寒くなった。——いろいろな苦勞をかけたな。でればすぐ、五十万円ぐらいは儲かる方法があるんだ。じきにとりかかるよ。

そのとき園部は自分のみじめな姿も忘れて、冬子に虚勢をはっていた。冬子はいつそうみじめな思いがした。華麗であるべき筈だった夏が、こうもみじめになることは予測していなかった。夏になったら別荘を借りきって避暑に行こうと園部は春から提案していたのだ。

それからすでに二か月がすぎている。

冬子は相変らず酒場にでていたが、園部は終日部屋に閉じこもっていた。

冬子が皆川と住んでいた部屋を引きあげてから、現在いる部屋で四回引越しをしてきた。園部が詐欺をするたびに居を変えねばならなかったからである。引越すたびに園部はまとまった現金をつかんでいた。園部と同棲しだしたと

き冬子は酒場をやめていたが、園部が留置場に入ると同時に、もとの酒場に勤めだしたのだ。

二

四時になると冬子は店にでる仕度をする。庶民的なごく平凡な顔だったが、化粧をすると個性的な特徴のある顔に変わった。冬子はちゃんとそれを計算していた。眉毛はまわりを毛抜きで抜きとり、細い輪型にした。そこへ墨をひくと、優雅な出来栄えだった。目は切れをながくみせて墨を引いた。ながい睫毛^{まつげ}だったので、きわだった目になった。いろがくろい方だったので、口紅は明かるい色をえらんだ。オレンジ色に近い原色の朱だった。こうして化粧をすますと、沈んだ、憂いを帯びた顔になる。髪はうしろで内巻きにした。そして全体的に貴族的な顔になる。冬子はそれを仕あげるのにいつも一時間を費した。それは楽しい一刻だった。

いまま鏡に向って化粧をしている冬子のそばで、園部は朝から何度も読んでいる朝刊に目を通していった。冬子は化粧しながらも、園部が新聞のどこを読んでいるのかを知っていた。園部は何度も同じ求人欄をみていた。詐欺をやるにも、すでにとりつくところがなかった。園部はいつも計画的に詐欺をやるのではなく、ことの成り行きで突発的にやるが多かった。自動車のセールスマンをやっているうち、現金が入用になってくると、そのままずるずると、販売行為が詐欺行為に移行した。テレビのセールスマンをやっているうち、ある程度の期間がすぎて会社にも信用ができてくると、架空の名義人にテレビを月賦で売ったことにして、品物は現金に、かえてしまっていた。

園部はあるとき冬子に、自分がかつて特務機関にいたと語った。特務機関がなんなのか冬子は知らなかった。園部はくわしく説明した。きき終ったとき冬子は、園部の冷酷な性格や、目的のためには手段をえらばぬところや、他人に迷惑をかけてすこしも呵責^{かざく}を感じないところを、理解できるような気がした。

とにかく園部には計画性がまるで欠けていた。特務機関にいたことを園部は誇りにしていた。悪を標榜して生きていることで、現代の英雄を気どっていた。

いまもいま、園部が求人欄に目を通してゐることで、もし園部が運よくどこかの会社にもぐりこめたとしても、それからの園部の行動が冬子にははっきりわかつてゐた。いくつもの無計画な詐欺行為が起きるだけだと思つた。しかし冬子は内心のどこかで、園部がそうなるのを望んでゐた。

冬子が皆川と別れて園部といつしよになることでは、冬子の衝動的な性格のほかに、いくぶんかの打算も加わつてゐた。冬子は絵をやつてゐた。いつまでも酒場にて皆川を助けるよりも、車を乗りまわし、割烹料理屋で数日もすごせる自由な身分の男、つまりその男についてゐる限り、自分のこれからの絵の勉強も保証されると思つたのだ。

なんでこんな因果なことになつたのだらうと冬子は店にでるたびに自分に腹がたつてくるのだが、しかしやはりどこかで園部を愛してゐた。かつて冬子を惹きつけた園部の魅力が消えてしまつたやうな何かが残つてゐるとすると、それはなんだろうと冬子は考へてみた。どう考へてもセクス以外にはなかつた。すでに男のすべてを知つてしまつたいま、計画性のない男が結果的にどうなるかを知りすぎるほど知つてゐるいま、自分がこうして酒場にて男を養つてゐるのは、やはりセクスのためだと思つた。

園部は家においても、なにひとつ冬子の手伝いをしなかつた。働きにでゐる女のズロースを洗うほどの気概も持ち合せてゐなかつた。粗野なセクス行為のほかには何も持つてゐなかつた。冬子はいまにしてはじめて、かつて自分を惹きつけたのが、園部の荒けずりな粗野な面であつたことを知つた。

園部は数日前から獺本を書いてゐた。詐欺をやるくらいだから原稿を売りつける先があるか、あるいは自分で秘密出版をするかのどちらかだらうと、冬子は氣にもとめてゐなかつた。園部は最初、冬子にかくれるようにして原稿を書いてゐたが、つい二日前からは、こんなものを書いてゐるんだ、ちよつと金になるよ、と冬子に読んでみると言つた。好奇心も手伝つて冬子は二、三枚読んでみた。露骨なことだけが取得の^{とらふ}ごく低劣な内容と文章だつた。内心冬子はそんなものを書く男を軽蔑した。途中で読むのをやめて冬子は男の顔をみた。男は照れてゐた。なんのことはない、夜毎の自分達の営みがことこまかに書かれてゐるにすぎないではないかと冬子も照れてゐた。

——ほんととはこんなもの書きたくないんだが。

と弁解がましいことを言う園部に、冬子は、夏の盛りに警察をでてきたときの男を感じとっていた。卑屈でみじめな男。しかしある面では冬子は男に同情していた。同情というより憐憫の情にちかかった。男は冬子に対して常に一定の地位を保つために詐欺をやったとも言えた。読めもしない内容の本を本棚に並べておく行為を続けるためにも、是非とも金が入用であったのだ。そのためには、例えば、十万円の現金を握って冬子の前に現れても、その現金の入手経路を冬子に語ることはしなかった。卑劣な手段で得た金が、英雄的な行為で得ることのできた金だという風にすりかえられていた。

女に対して頼もしい感じを与えたいという男のもっている共通性、園部もこの範疇に入っている男だったが、しかし並はずれた虚勢をはっているところがあつた。現在十万円の金も持ち合わせていないのに、何百万円の金がいまにもころがりこむような夢想をしていた。それが男の虚勢であり、夢想であることがわかっていながら、冬子は男の言葉にうなずき返し、やはり男は頼もしいという感じをどこかで抱いていた。しまいには男も冬子も、そうした虚勢をはることに自己嫌悪を抱くまでになつた。

冬子は化粧をすまずと服を着換えた。園部は冬子の帰ってくるまで、履歴書を書いたり、百万円を儲ける計画を紙に丹念にノートしたりするのが習慣だった。この場合百万円を儲けることは、商取引によって生じる利益ではなく、詐欺の金額が百万円ということだった。

でがけに冬子は園部と接吻した。まったくそれだけが唯一の情熱のように、男は毎晩冬子に挑んだ。男はどこかで冬子を失いたくないと思っていた。終日虚勢をはりながらも、まとまった金額の詐欺が成立するまでは、冬子に養なわれていたいというずるさをもっていた。男は接吻がたいそううまかった。冬子のくちのなかを、齒のあいだを、すきまを、男の舌が奔放に動いた。そんな一刻、冬子は店にでるのがいやになることがある。男は日頃から、自分が名門の出であることを自慢していた。九州の豪族の息子であるが、周囲に容れられずに不遇であるとも言った。死んだ父親は貴族院議員であつたとも語つた。冬子はそれを信じた。男はどちらかというと、多くの人が詐欺をしでかすような男を想像するのは反対の、おっとりした顔をしていた。人形のような感じだった。冬子は男の人形のような感